

# 母親との関わりが困難な学生への指導の一考察

## —小児看護学実習指導のあり方を探る—

奥山 朝子<sup>1)</sup> 山本 捷子<sup>2)</sup>

### **A consideration instructed for nurse students who have difficulties with attending mothers.**

#### **— How the instruction should be given to the nurse students —**

Asako OKUYAMA Shoko YAMAMOTO

**要旨：**小児看護学実習において、付き添いの母親との関わりが困難な学生の事例を元に実習指導のあり方を分析し、以下のことが明らかになった。

1. 教師は学生の問題や行動目標を明らかにするために、学生の不足情報に関する助言、理論と関連させた現象の分析、カンファレンスの活用、援助モデルの提示など、学生の困難な状況に対応した教育技法を駆使することが必要である。
2. 学生が自己表現できるような教師との人間関係を形成することが基盤となる。受容や共感という教師の基本的態度に加えて、グループメンバーの間接的なサポートが得られる方法を探るなど、学生の実習意欲を維持することが大切である。

**キーワード：**家族との関わり、小児看護、実習指導

**Summary :** Hospital training instruction was analyzed training for pediatric nursing based on the examples of students who have difficulties with attending mothers. The following points were clarified as a result of this analysis.

1. In order to clarify problems and action targets of nurse students, teachers must fully use educational techniques that meet the difficulties faced by nurse students. These techniques include providing advice to supplement information deficiencies of nurse students, analyzing phenomena by connecting theory with practice, making use of conferences, and presenting assistance models.

2. The forming of a human relationship between teachers and nurse students in order to allow nurse students to express themselves is the basis. In addition to the basic attitudes of teacher, such as acceptance and empathy, it is important to maintain the motivation of nurse students during training by investigating methods that allow nurse students to receive indirect support from group members.

**Key words :** relationship with family, pediatric nursing, hospital training instruction

はじめに

小児看護学実習において、母親との関わりが困難な学生への指導に関する研究の中でも多く述べられているが、付き添いの母親と子どもが密着した親子関係の中では、学生は母親だけでなく子

もとも良い関係が築けず実習意欲を低下させ、学生の実習成果はあがらない。そこには、教師の適切な援助が必要である。

付き添いの母親との関わりが困難であった学生の実習経過とその指導に焦点を当てて、学生の記

看護学科 1) 助教授 2) 教授

録と教師の指導を分析し、効果的な小児看護学実習指導のあり方を検討した。

## I. 研究方法

事例分析：学生の実習記録と教師の指導ノートより、2週間の学生の状況と学生の受け持ち患児、母親への関わりに対して教師の指導経過に従い実習指導のあり方を分析する。

## II. 事例紹介

### 1. 学生の背景

学生NはA短大3年生で、この小児看護学実習は3年次になって初めての実習であった。これまでの実習体験は1年次の基礎看護学I期実習（1週間）、2年次のII期実習（2週間）および母性看護学実習（3週間）である。

実習前の調査では、学生は「子どもとの関わりが分からない」と記していたが、性格は勝ち気な面もあるが素直であると自己分析していた。

### 2. 学生の受け持ち患児と付き添いの母親

受け持ち患児は10才の男児K君。

病気は「赤芽球癆」で貧血が強く倦怠感があり元気がない。検査データは赤血球数185万/ $\mu$ l、ヘモグロビン値5.4g/dl、ヘマトクリット値15.9%であった。

治療は安静と輸液であったが、点滴輸液は入院3日目に漏れたので抜去された。

入院経歴は、1回目は6歳の時に気管支喘息、2回目の入院は、8歳の時で貧血が強く「赤芽球癆」と診断された。原因不明で1ヶ月間入院し、その間に6歳から内服している気管支喘息の薬が原因と考えられて薬を中止したところ症状が軽快し退院した。今回も原因不明で、入院当日に骨髄穿刺がされた。

母親は40才で、子どもの病気が再発し、今回も原因が不明であること、治療が安静だけという子どもの病気や治療に対する不安からか、口数も少なく、表情は暗かった。

K君が就学時に気管支喘息を発症していることから親子の結びつきは密着した関係にあったと考えられる。

学生はこの患児を入院3日目から9日間受け持った。

## III. 受け持ち患児と母親への学生Nの関わり状況の経過

学生の実習経過と教師の指導経過について表1に示した。

実習1日目と2日目は、学生Nは子どもとも母親とも会話が続かないことに悩んでいた。

学生NがK君に病状について聞いても、K君は母親の顔をうかがうような様子で、自分には何も話してくれない。母親は何も話さず、じっとしているだけであった。

学生Nは看護記録からK君の趣味が将棋であることを知り、K君の趣味を通して関わりとの接点を見いだそうと自分も将棋を勉強しようと計画を立てた。

実習3日目、学生Nは教師に「母親の顔を見ることができない」と訴えてきた。

K君と母親は前日と同じ状態であった。

実習4日目の記録では、学生NがK君の血圧測定を終了した後「血圧安定してきたね、良かったね」とひとり言のように言った。それを聞いた母親が「そうですか」と反応した。学生Nは、「今までの自分は母親と話しをしなればと焦っていた、自然にでた言葉を母親が受けて応えてくれたのだと思う」と分析している。

実習6日目、学生Nが足浴をしようとしてK君に説明しているところに母親が入ってきた。教師は学生Nが母親にどう反応するか見ていたが、「今、K君に足浴を勧めていたところです」と学生Nは母親に自然に話した。すると、母親はK君に足を洗ってもらおうよう促した。

この日の学生Nの記録には、自分が計画したケアに母親が協力してくれたことの喜びと母親が自分を受け入れてくれたことに充実感を強く感じていることが記述されている。

実習9日目、学生NがK君と将棋をしていると、母親がK君に「今度は、学生さんにも勝たせてあげなさい」と笑顔で話した。学生Nの記録では「K君の好きな将棋を覚えてK君と一緒に将棋をすることは、K君と自分だけでなく母親との関係においても役立った」と分析している。

また、その日に、母親がK君の貧血の状態がどの程度に改善しているのか分からないというので、学生Nは受け持ちナースの許可を得て血液検査値の変化について説明した。

母親は「医師に聞けなかったので何もわからなかった」と言い、検査値が良い方向になっているこ

とを学生から聞き、笑顔が見られ安心した様子であった。

これに対し学生は、「母親はK君の検査の結果を待っていた」ということに気づいた。

実習終了後のレポートには、「母親の心理的状态を理解しなければ適切な関わりは望めない。また看護という仕事は人と人との関わりの上に成り

立っていると思った」と記録していた。

実習終了後の面接では、「実習2, 3日目が一番つまらなかったが、自分が母親を意識しすぎて何もできずにいた自分に気づいた。それからは、母親が徐々に自分を受け入れてくれているのがわかり、うれしかったと同時に学びの多い実習だった」と話した。

表1 学生の実習経過と教師の指導

時期	患児、母親と学生	学生の気持ち	教師の関わり、指導
実習1, 2 日目	<p>学生がK君に病状について聞くと、K君はいつも母親の方を向いて答えてくれない。</p> <p>「お昼は売店で買ってきているのですか」と学生が母親に尋ねると「ええ」と答えるだけで会話が進まない。</p>	<p>10歳のK君が自分の状態の事について尋ねられると母親の方を向いてあまり話さなくなるのはなぜなのか、気になった。</p> <p>母親は無口なのか、K君の状態が心配なのか、疲れているのか、まだ把握できない。もう少し時間をかけたい。</p>	<p>学生はK君の趣味である将棋を学習し始めたと話し、K君との関わりを見出そうと努力している。関わりは時間が解決すると考え様子を見た。</p> <p>K君の気になる行動については10歳という年齢から考えるように助言した</p> <p>母親は元気がなく暗い表情である。医師からの母親への説明内容を確認するように学生に働きかけた。また学生に障害受容過程の部分を復習させた。</p>
実習3日目	<p>学生が母親にK君の治療のことについて話し始めると「そうですね」の一言で終わってしまう。</p> <p>学生は教師に「母親の顔を見れない」と話す。</p>	<p>他の学生は患児やその家族との関わりがうまくいっている。</p> <p>母親と何を話をしたらよいか分からない。</p>	<p>母親はK君の病気について不安な状態にあり、未熟な学生が母親との関係形成には困難な状況にあると判断した。</p> <p>そこで、母親と学生の気持ちや言動について教材化しカンファレンスでディスカッションさせた。</p> <p>母親はK君が良くなってくれることを願っているのに対し、学生は何か母親と関係を成立させようとしていた。教師は、学生が母親と同じ目標に向かうことが大切と考え助言した。</p> <p>また、母親はK君に関する情報で何が 필요한のか、学生としてできることは何なのかを考えるように指導した。</p> <p>母親には誠実に関わるのが大切であると学生に助言した。</p>
実習4日目	<p>学生は、K君の血圧を測定し「血圧安定してきたね。良かったね」と独り言のつもりで話した。これに母親が「そうですか」と今まで聞いたことのない明るい声で答えてくれた。</p>	<p>K君の血圧測定は毎日行っており、血圧の値を評価して伝えたことは母親にとっては良い結果であったため、自分の言葉に母親が応えてくれたのだと思った。</p> <p>血圧を測定し、母親を意識しないで自分の思ったことを素直に言えた。</p> <p>気持ちが少し楽になっていた。</p>	<p>カンファレンスでのディスカッションが学生に役立っていると判断した。</p> <p>学生の喜びを共有し、母親への関わりとしては、学生として誠実に関わっていくことを再確認した。</p>
実習6日目	<p>学生がK君に足浴を進めていると母親も一緒になってK君に足浴をしてもらうよう促していた。</p>	<p>自分を母親が受け入れてくれた。母親の言動がうれしい。</p>	<p>学生と患児、母親との関わりで困難な様子であれば援助しようと学生のケアに同行したが、学生は母親に状況を説明でき、ケアに移ることができた。教師は学生の言動を見守った。</p>
実習9日目	<p>K君と将棋をしていると、母親がK君に「今度は学生さんにも勝たせてあなさい」と笑顔で話した。</p> <p>K君の貧血の状態が、どの程度になっているのか分からない母親に、学生はデータの変化について説明した。母親は、「医師に聞かなかったので何もわからない」といい、検査値が良い方向になっていることを学生から知り安心しようだった。</p>	<p>K君の好きな将棋を覚えてK君と将棋をすることは、K君と自分だけでなく、母親との関係においても役立った。</p> <p>採血の結果を母親は待っていたことに気づいた。</p>	<p>学生の関わりを見守った。</p>
<p>学生の実習終了後のレポート レポートには、母親の心理的状态を理解しなければ、母親との適切な関係形成は望めない。 また、看護婦という職業は人と人との関わりの上で成り立っていることを感じた。</p> <p>実習後の面接での学生の会話 実習2, 3日目が一番つまらなかったが、母親を意識しすぎて何もできずにいた自分に気づき、自分の目的とする方向性を軌道修正できてからは、母親が徐々に自分を受け入れてくれているのが分かりうれしかったし、学びの多い実習であったと話した。</p>			

#### IV. 教師の指導経過

実習1, 2日目、学生Nは母親とのコミュニケーションが成立しないこと、他の学生はうまく関わりができていのに自分はどうか関わったらよいのかと悩んでいた。

多くの学生は、付き添いの母親に助けられて子どもと関わることができ、また子どもとの関わりを通して母親とのコミュニケーションが進んでいくのが通例である。

学生Nの子どもとの関わりについては、患児の趣味である将棋を通して患児と関わろうとしているので、時間が解決すると考え、教師はそのまま様子を見ることにした。

母親との関わりについては、学生Nは母親と何か話さなければならないと焦っており、関係形成するには援助が必要と判断した。そこで教師は学生Nに対して、まず母親が子どもの病気について医師からどう説明されたのかを確認するように助言した。また、母親の心理状態については、学内で学習した障害受容過程のどの時期にあるのか復習することを促した。

実習3日目、学生Nが心理的混乱状態にあったので、教師は母親の気持ちについて以下の様に分析した。K君の病気の原因がわからない、病状が回復しているのか、治療は安静だけでよいのか、心配で葛藤の状態にある。そのような母親の心理状態では、未熟な学生Nを受け入れることはできないと判断した。また、こうした母親とK君との関係の中では学生Nは子どもとの関わりにおいても学生らしく行動できないだろうと判断した。そこで、教師は「母親との関わり」について、カンファレンスで話し合うことを勧めた。学生Nの事例を教材化してグループメンバーと共有することと、メンバーとディスカッションすることで、この学生Nの気持ちを理解し学生同士で心理的に支えてもらおうと考えた。

未熟な学生同士のディスカッションでは、母親との関わりの方法論だけにとどまってしまうがちなので、教師はカンファレンスの中で、学生Nに母親はK君がどうなることを望んでいるのか、ということについて明らかにさせた。また、この時点で学生Nが優先する行動は何かを質問した。そして、母親との関係形成よりも子どもの看護問題を明らかにし、計画、実施することが優先されることを確認させ、母親を意識しすぎていることに気づかせた。

教師は学生Nに母親との関係において、今の段階では母親に直接関わらないで、K君との関わりを大切にすること、母親には身構えずに誠実に関わることが大切である、と助言した。

実習4日目には、前日の学生Nの様子から教師は、学生Nが患児、母親との関わりの中で、困難な様子であればモデルを示そうと考え、学生Nのケアに同行したが、学生Nが母親と自然に会話ができているのを見て学生Nの言動を見守ることにした。

K君との関わりを通して母親が学生Nを受け入れ、関係が形成されてきたと判断し、学生Nの記録に教師は、学生の喜びに共感したことを記し、さらに「母親の質問等に対しては学生として誠実に応えてほしい」とコメントを加えた。

実習終了後の面接で、教師は学生Nの母親との関係形成には苦慮したことに共感し、良い経験ができたことを認めた。そしてこれからも自分の言動を常に振り返り、目的達成に向かって努力することが大切であると助言した。

#### V. 教師の指導分析と考察

キング<sup>1)</sup>は「看護は看護婦とクライアントの人間的な相互行為のプロセスである。その相互浸透行為＝目標達成のためには「正確な知識」と「適切なコミュニケーション」が不可欠な要素である」と述べている。

学生が子どもやその母親と関わっていくには、これらを支える学生の意欲が重要である。

学生が患児と母親についての持つべき「正確な知識」すなわち母親に関する情報から母親の状況を理解すること、「適切なコミュニケーション」と「意欲」がどのように変化してきたかに焦点をあて、以下の三点と学生の時間的経過に伴う教師の指導について、実習指導を分析し考察を加えたい。

##### 1. 学生Nが心理的混乱状態となった原因

学生Nが「悩んでいる」段階において、学生Nは患児と母親との親子関係の中に入っていけないことから疎外感を感じ悩んでいたと思われる。

学生Nは、患児の母親とのコミュニケーションについて「成立しないことに対し、悩んでいる段階」から実習3日目には「心理的混乱状態」へと変化している。

そこで、教師は学生Nが母親の心理状態を理解す

ることが先決だと考え、医師からの母親への説明を確認するという母親についての情報収集の必要性と、母親の心理状態について既習学習を想起させている。

しかし、学生Nは親子関係という強い結びつきの中に直接入り込んで、情報収集したり、ケアをしなければならない、また子どもや母親とも信頼関係ができなければならないという学生役割の面からと、母親の存在を過剰に意識しているために教師の時間的感覚より早く混乱状態に至ってしまったと考えられる。

## 2. 学生Nの行動目標の明確化

実習3日目、学生Nは心理的混乱状態にあり教師に援助を求めている。そこで教師は、学生Nの経験している現象を教材化し、カンファレンスで話し合うことを学生Nに提案している。

相互作用が成立するためにはコミュニケーション技術と相手の状況に合わせた関わり方が必要である。にもかかわらず学生Nは母親との関わり方の成立を第一の行動目標とし、母親は学生Nとの関係よりも患児の状態が良くなることを目標にしている。学生Nは母親とのコミュニケーションにおいて一方通行になっていることに気づいていない。これらについて教師の助言やグループメンバーの意見によって、学生Nの行動目標が明確になり、学生Nは母親との認識のずれに気づいている。また教師から具体的な関わり方として、子どものケアを優先して実施する。母親へは学生として誠実に対応することを助言した。その結果、学生Nは関わり方の方向性が明確になっている。

実習4日目以後、学生Nの行動目標が明確になったが、具体的関わり方に関して、教師はモデルを示そうと学生Nのケアに同行している。関わり方の経験が少ない学生にとって、具体的な関わり方

として教師がモデルを示すことも必要である<sup>2)</sup>。

これらによって学生Nは、4日目以後徐々に本来の学生自身の行動目標に向かうことができ、これに伴って母親との関わりも徐々に成立してきていると考えられる。

## 3. 学生Nの実習意欲の維持

実習3日目に母親との関係が成立しないことから学生Nは心理的に混乱状態にあり、実習に対する意欲が低下傾向にあった。しかし教師は学生Nに自信を持たせようと、学生Nが患児の趣味を学習していることから患児との関わりについては積極的に関わろうとしていることを認めている。

学生Nが教師に援助を求めてきた時には、教師と学生Nの1対1で解決するのではなく、カンファレンスで話し合わせるなど学生同士の支え合いも活用している。

学生Nが関わり方の方向性を見出すには、教師が学生Nの性格や能力を判断しつつ学生Nを信頼し関わりを見守ることで、学生Nは実習意欲を維持して学生らしく母親との関係を形成していくことができている。

## 4. 学生の時間的变化に対応した教師の指導

実習初期の3日間位は学生Nは母親との関係ができないことで実習意欲を低下させさせようとしていた。しかし教師は子どもとの関わりの方を優先させることや母親の心理状態を把握することが大事であると指導し、その結果、学生Nは少しずつ自信を持って子どものケアを実施していると母親の方も学生に関わるようになってきた。このプロセスは学生の時間的变化に対応した教師の指導の成果といえる。

臨床における看護学生の実習指導の構造は、図1に示すような相互の関わりで成り立っている。

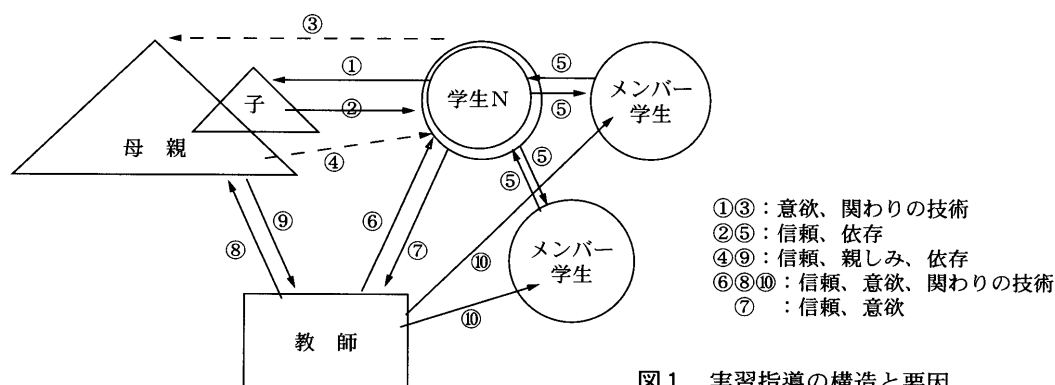


図1 実習指導の構造と要因

効果的な指導とは、この構成要素を展開することが重要である。具体的には、教師は学生の当面している問題状況を把握し(図1. ⑥)、一方で患児と母親の状態を把握して看護問題をアセスメントすること(図1. ⑧)が同時に行われ、次いで学生と患児、母親との関わりができるようにその関係を把握・分析し(図1. ①~④)、学生への指導目標を明確にするところからスタートする。

Van Hoozer<sup>3)</sup>は、良きリーダーシップを発揮するには①教師がコミュニケーションを主に「指導する(Telling)形態」、②教師が積極的に指導しながら学生を参加させていく「説得する(Selling)形態」、③教師が時々学生に必要な情報を提供したり、重要事項を強調したりする「参加する(Participating)形態」、④教師は学生に状況をコントロールするのを任せて、教師は参加者としてあまりコントロールしない「委任する(Delegating)形態」があるというが、実習指導のあり方も同様のことがいえる。

すなわち、本事例のプロセスをたどってみると、学生が混乱している原因と行動目標を明確にし、関わりの具体的な方向性を見出すまでは、教師は「Telling、Selling、Participating 形態」で学生に関わり、具体的な関わりの援助については、学生のケアに同行したり、学生を信じて見守る「Delegating 形態」へと変化していることがいえる。

#### おわりに

付き添いの母親との関わりが困難な状況にある学生を指導し、以下のことが明確にされた。

1. 教師は学生が混乱している原因や学生の行動目標の明確化に向かって学生の不足情報に関する助言、理論と関連させた現象の分析、カンファレンスの活用、援助モデルの提示など学生の困難な状況に応じて時間的変化と対応した教育技法を駆使することが重要である。

2. 学生が自己表現できるような教師との人間関係を形成することが基盤となる。受容や共感という教師の基本的な態度に加えてグループメンバーの間接的なサポートを得られる方法を探るなど、学生の実習意欲を維持することが大切である。

#### 引用文献

- 1) 舟島なをみ：キング看護理論と看護教育、Quality Nursing, p 8, 4 (11), 1998.
- 2) 出口洋江：看護学生と患児、母親との関係形成、第26回小児看護学会、p 132、1995.
- 3) 阿部俊子：臨床実習、看護教育、37(10)、p 830、医学書院、1996.

#### 参考文献

- 1) 藤岡完治：臨地実習教育の授業としての成立、看護教育、37(2)、1996.
- 2) 猪俣昌子：看護学生と受け持ち患者の人間関係形成過程とその要因、第30回看護教育学会、1999.
- 3) Imogene M. King (杉森みどり訳)：キング看護理論、医学書院、1985.
- 4) 川原遵子他：臨床実習前後における看護学生の問題解決能力の変化、第25回看護教育学会、1994.
- 5) 小林栄子他：学生と患者との関係を測定するための基準の作成、第20回看護教育学会、1989.
- 6) 森股昌子：看護学生と受け持ち患者の人間関係形成過程とその要因、第30回看護教育学会、1999.
- 7) 奥山朝子他：子どもとの関わりが困難な学生の実習指導のあり方、日本赤十字秋田短期大学紀要第4号、1999.
- 8) 小川妙子：キング看護理論を用いた看護学実習指導の展開、Quality Nursing Vol4, No11, 1998.
- 9) 山田雅子他：看護教育における教師と学生の関わり、東京医科大学看護専門学校紀要9(1)、1999.
- 10) 山本捷子他：日本赤十字秋田短期大学の小児看護学実習の実態と課題、日本赤十字秋田短期大学紀要第4号、1999.
- 11) 安酸史子：経験型実習教育の考え方、Quality Nursing 5(8)、1999.
- 12) 安酸史子：経験型実習教育の提案、看護教育、38(11)、1997.